柏原市文化財概報　1989-Ⅵ

安　堂　遺　跡

―新発見遺跡の調査―

１９８９年10月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市の埋蔵文化財包蔵地は、市域の３分の２以上を占め、大阪府下でも最も遺跡が集中しているところです。

今回の調査は、新発見遺跡で柏原市の歴史を紐解く重要な成果を得ました。古大和川の河岸と考えられる遺構は、河内大橋や智識寺が存在した時代の古環境を復元するための貴重な発見です。調査の実施にあたって事業者より文化財の保護と愛護の立場からご理解とご協力を頂いたことに感謝致します。今後一層柏原市の歴史が明らかになることを願うものです。

柏原市教育委員会
教育長　庖刀和秀

例言

1．本書は、平成元年度に柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した発掘調査の中で、安堂遺跡（88－３次調査）における発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として、柏原市太平寺１丁目130－１の所在地で、昭和63年８月22日～８月31日（第１次調査）、平成元年６月20日～６月23日（第２次調査）の期間実施した。調査に要した諸費用は、依頼者が負担した。

3．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

松井隆彦	空山　茂	竹下　賢	山田寛顕	奥川滋敏	桑野一幸
安村俊史	石田成年	谷口京子	寺川　款	藪中優香	津田美智子
伊藤芳国	稲岡利彦	岡田嗣生	田中国雄	本田恵治	前田耕司
松井美保子	尾野知永子	南ゆう子	寺尾正美	青木久美子	乾　優世
小西千賀恵	岡田久美	奥野　清	井上岩次郎	谷口鉄治	吉村啓次
浜木一二	鈴木　勝	田戸岩一	堀　一之	乃一敏恵	横関勢津子
吉居豊子	村口ゆき子				

4．本書の構成、執筆は、北野が行った。

5．本書で使用した標高、方位は、特に注記しないかぎりＴ．Ｐ．と磁北である。

安堂88－３次調査

・調査地区所在地　　柏原市太平寺１丁目130 －１

・調査担当者　　北野　重

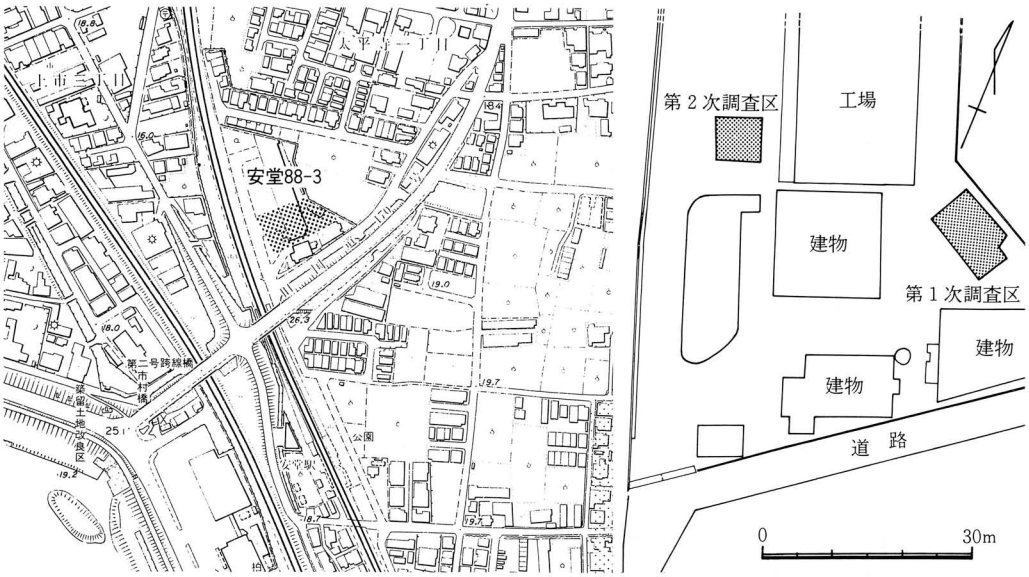
・調査期間　　昭和63年８月22日～８月31日　（第１次調査）

　　平成元年６月20日～６月23日　（第２次調査）

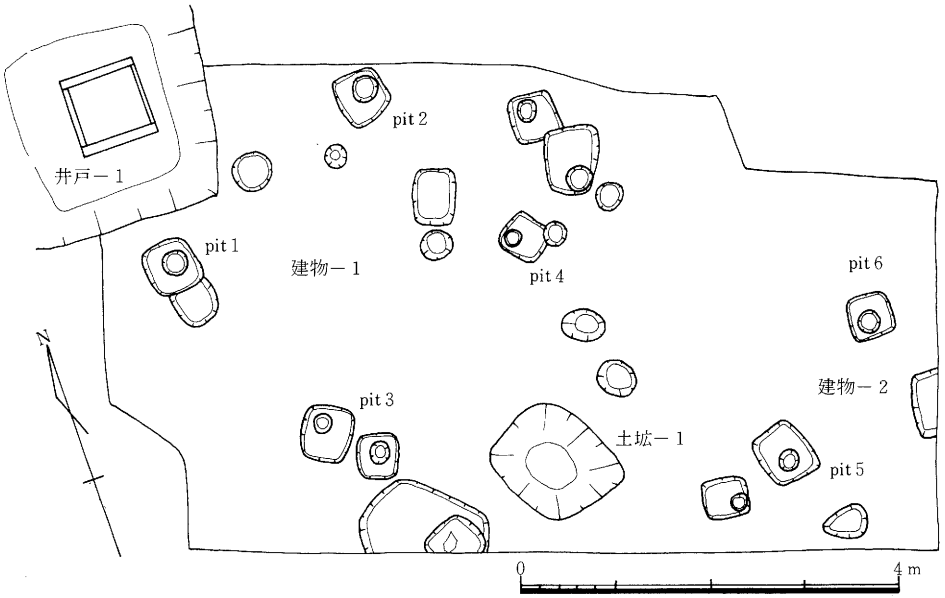
・調査面積　　105㎡／4,561.75㎡

当地区は、河内六大寺（智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂）の内智識寺と家原寺の二寺が建立された西側平野部にあたり、当初古大和川の氾濫原と考えられていた場所である。智識寺は、「……去辰年（天平十二年）河内国大県郡乃智識寺爾座盧舎那遠礼奉天則朕毛欲奉造止思登毛得不為間……」（東大寺鎮守八幡大神への宣命文）聖武天皇が東大寺の大仏が発願される契機となった飛鳥時代中頃に創建された寺院である。また、続日本記等の文献に書かれている智識寺南行宮が近年の調査でその比定地となる根拠になるような遺構と遺物を検出しており、そして、万葉集に記されている片足羽河（大和川）に架けられていた左丹塗の河内大橋が存在して、未だその場所が明確でないが近在している。

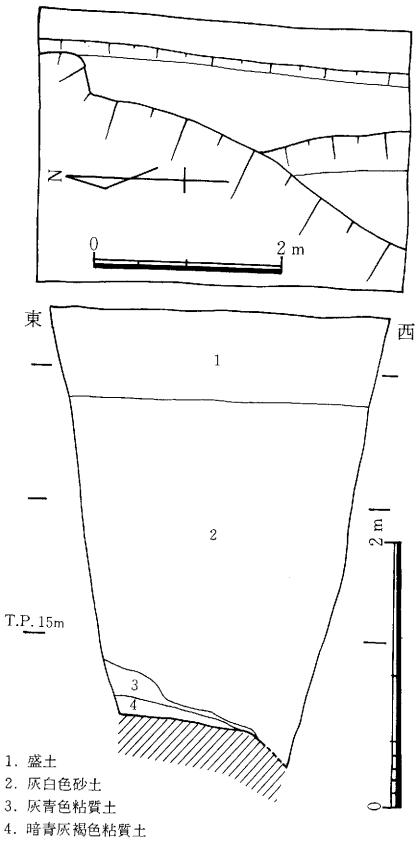
第１次調査は、約70平方メートルを調査して、井戸１、土坑１、建物の柱穴となるピット多数を検出した。遺物は、土師器、須恵器、瓦、製塩土器、木器等が出土した。時期は、７から８世紀にかけての集落址であることが判明した。



図－１　調査地位置図



図－2　第1次調査区平面図



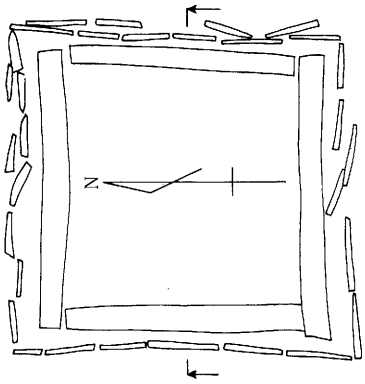
図－3　第2次調査区平面図・断面図

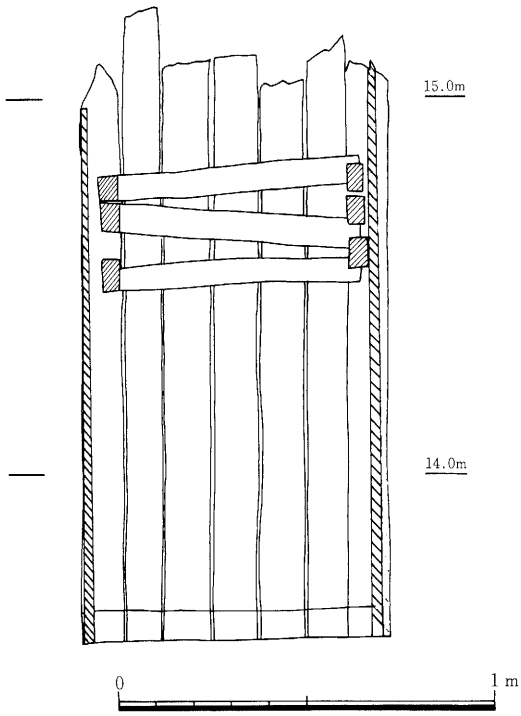
井戸－1

調査区の北東隅に検出した奈良時代の木枠の井戸である。規模は、掘方一辺が約 2.5m、木枠一辺が約85㎝、深さは約2mを測り、木枠の方向はほぼ磁北を向いている。枠組は、底部と底部から1m程上方に横板を入れ、縦方向に板をその横板の後方にたてかけている。縦方向の板の間隙を補強するため南北と東側の辺に裏側から短い板材を入れている。井戸の上部は遺存状態が悪いが下部は良好である。底部の横板は、端部を斜めに切り落し四角形に組み合わされ、横木の接合部に木目釘を通している。横木は、後世の土圧によって内側へ大きく湾曲している。中程にある横板は、底部の横木のような組合せでなく土圧によって自然に固定して各方3枚ずつ内側へ傾かないように添えている。上部の木組等は、井戸埋土に落ち込んだものがなく、詳細は不明である。井戸内及び掘方埋土から、土師器、須恵器、木器等の遺物が多数出土した。掘削時期は、飛鳥時代後期と考えられる。

その他の遺構

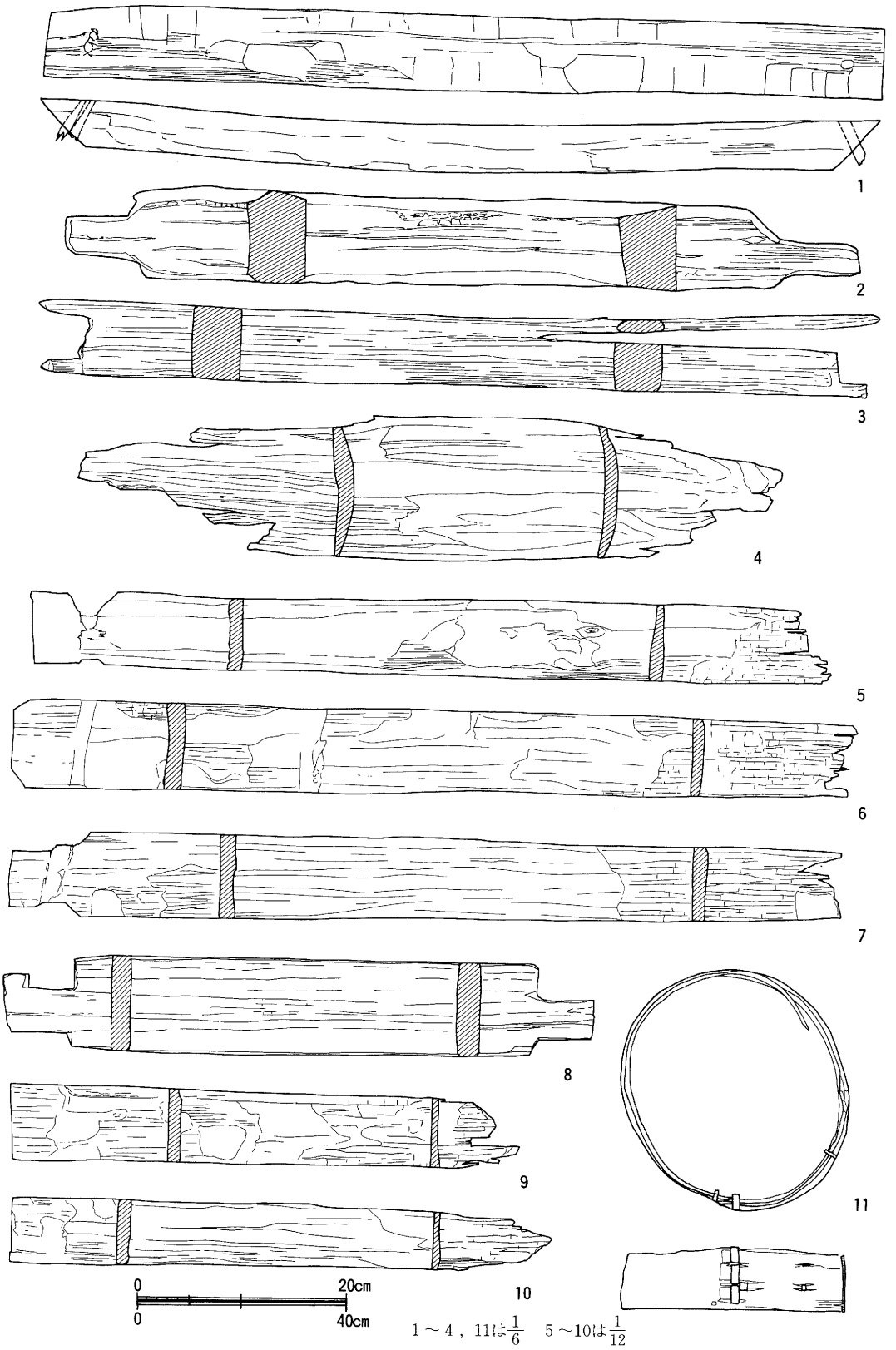
当調査区から検出したその他の遺構は、土坑１、建物２及びピット多数である。土坑は、調査区中央部西側で検出した隅丸方形のもので、一辺105から125㎝、深さ約50㎝を測る。掘方断面は、円弧状を呈する。埋土は、薄茶灰褐色粘質土である。出土遺物は、土師器（杯、皿）、須恵器（杯蓋身）があり、飛鳥時代中頃から後期にかけてである。建物が２棟検出したが全容は知り得ない。時期は、飛鳥時代から奈良時代にかけて数度の建替えがみられる。



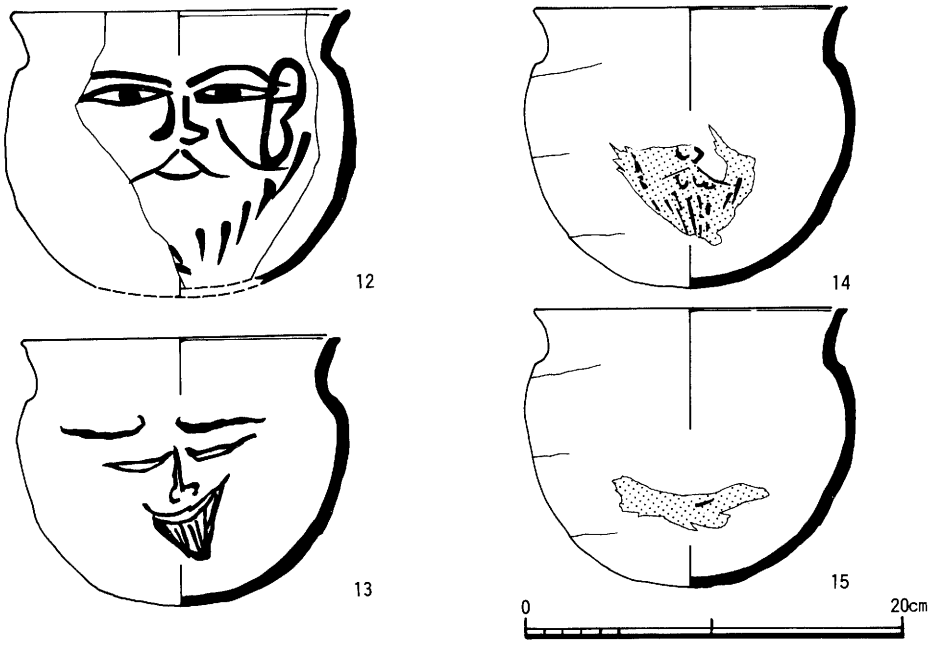


図－４　井戸－１平面図・立面図

第２次調査は、第１次調査の北西方向へ約20ｍの場所で約45㎡実施した。遺構は、古大和川の河岸と考えられる傾斜面を確認した。層位は、現地表面から約70㎝が盛土（第１層）、200～340㎝が灰色又は灰白色砂土（第２層）、５～25㎝が灰青色粘質土（第３層）、15㎝が暗青灰褐色粘質土（第４層）である。地山は、現地表面から3.4ｍ以上の深度で確認した。第３、４層が飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物包含層で土師器と須恵器が出土した。遺構は、南北方向に伸びる古大和川の河岸と考えられる部分を検出した。調査地内の東側部が高く、丁度中央部で傾斜変があり、西側へ急に深くなっている。川の埋土は、灰色又は灰白色砂土で非常に多くの湧水が出る。河の堤防状の起伏はなく、一度形成した遺物包含層が水流によって徐々に削られているような状況で、河の直ぐ間際まで集落が存在したと考えられる。河内大橋を当調査区の周辺に比定する説があり、もしこの説が真実ならば、今回検出した河岸の延長線上に将来発見される可能性がある。



1～4，11は$\frac{1}{6}$　5～10は$\frac{1}{12}$



図－6　人面土器

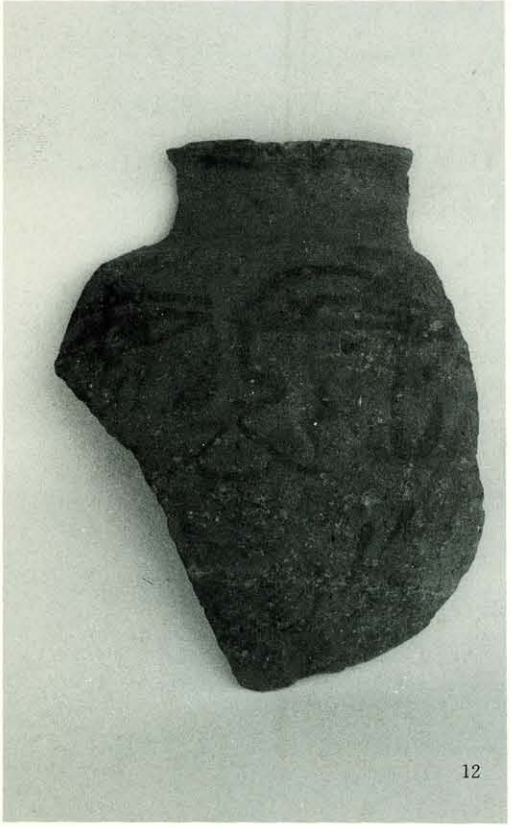
出土遺物

第2次調査区から土師器、須恵器が少量出土した。第1調査区から出土した遺物とほぼ同時期で細片であるので、第1次調査の概要報告書に掲載しなかった遺物と人面土器を報告したい。

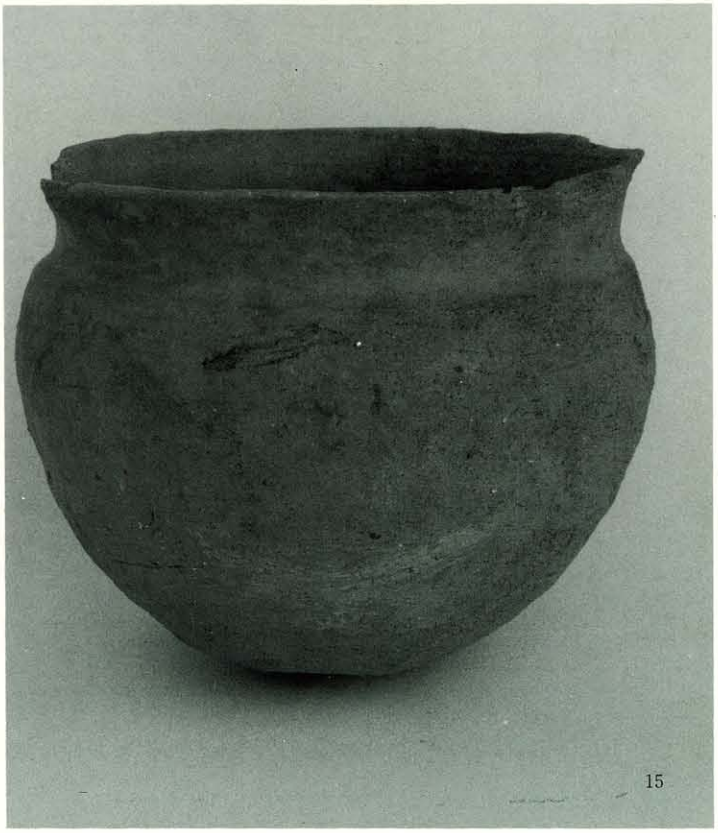
木器は、井戸－1の木枠とその埋土中から出土した曲物である。1は、井戸底部の横組木で木釘が両端部に遺存している。2、3は、中程の横木で組合せ用の枘と枘穴がある。4～10は、縦板に使用されたもので、転用材と考えられるものが多い。11は、乾燥のため楕円形となったもので、底板は縦木取（柾目）の一枚板である。側板は、重なり部内面にのみ斜めの刻目を施している。接合は、桜皮で2列前外3段後内2段綴じをしている。

12～15は、人面土器で井戸－1埋土中から出土した。12は、人面を描いた部分だけが遺存し、描写後故意に割られている。顔の部分が中央に凝集しているが、全体に太い安定した線で描かれ、その端部は太く始まっている。眉毛と目の表情は、穏やかな仏像のように落ち着きを持ち口も小さく微笑んでいる。智識寺の大仏を偲ばせるが口髭がある。13は、眉を寄せ目を細くして吊り上がらせた顔付の表情をした完形の土器である。12とはまるで反対の不動明王の顔付であろうか。線端は細く尖って撥ねたものでどの部分の線も波打ち揺れている。14と15は、同一個体の完形土器である。14は、顎髭、口、口髭、鼻の一部が描かれた後途中で中止したものである。また、その上からヘラ先状のもので擦り付け消そうとしている。15は、14の部分から90°回転した場所に同様の傷跡がある。その範囲は、口又は口髭の部分だけであり、わずかに墨の痕跡がある。

14



12



15